

## 佚題上方絵本について

小 林 勇

佚題を以て称したが、元題簽は半分以上残存している。それにはかろうじて『絵本風流三の(?)』の文字が読み取れるが、以下は欠落している。この書名では『国書総目録』及び『古典籍総合目録』に徴して該当するものがない。又『近世子どもの絵本集』上方篇卷末の「上方子ども絵本現存リスト」にも見当たらない。ただ上方絵本、就中一冊物に関してはその書誌は甚だ錯綜しており、この題簽が本来のものかどうかには疑問もある。内容は後に紹介する如く謡曲「邯鄲」の当世化で、「絵本風流」の文字はそれに該当するものの、以下が疑問である。無論それ以下が欠落していて書名の全体及び全冊数が不明であるから何とも言い様がないが、或いは一冊で完結している絵本(本書の内容はそうである)を後に三冊纏めて刊行したといった事情があり、その折の題簽ではないかとも考えられる。猶「上方子ども絵本現存リスト」によれば、香川大学附属図書館神原文庫に『風流邯鄲枕』なる一冊ものの絵本があり、丁数及びノドにある「かんたん」の文字が一致する。同文庫目録によれば幕末のものとのことであるが、念の為同図書館に照会した所、行方不明とのことでは参照出来なかったことを付記しておく。

ところでこうした一冊物の上方絵本は先ず子供向けである事が多いが、本書の場合そうとは考え難い。「何を以て「子ども向き」とするかは、近世と現代とではかなり喰い違いがある」<sup>(1)</sup>が、今そのように言うのは本書が嶋之内

の白人（なお「盧生」をもじった呂洲は風呂屋者の意。又本文中の「契淡の枕」の「契淡」は、普通「契短」と書くがこれも賤妓の名称である）を主人公としている故では必ずしもない。それよりも本書では、単なる話としての「邯鄲の夢」ではなく謡曲「邯鄲」の詞章を読者が知悉していることを前提としていて、そうでなければそれを逐語的にもじってゆく本文の面白さを理解出来ないという点にある。これは如何に当時としても、少なくとも幼童向けではなかったものと思われる。江戸で言えば青本黒本などに相当するものであり、中村幸彦先生の分類に従えば「江戸の草双紙の影響をうけた類」<sup>(2)</sup>に属するものであろう。

本書もこうした絵本の常として、作者名、画工名、版元名、刊年等は全く記されない。従って本書の成立に就いては何も分からないのであるが、ただ描かれた女性の髪型等から見てそう新しいものとも思われない。「この類（半紙本型）筆者」の子ども絵本はその最盛期を、明和（一七六四―七二）・安永（一七七二―八一）・天明（一七八一―八九）といった時期におき<sup>(3)</sup>とされるが、本書もその頃のものであろう。<sup>(4)</sup>その中でもいつ頃のものであるかによるのであるが、謡曲「邯鄲」の当世化であり、且つ江戸の草双紙の影響を受けたものであるとすると、気になるのは江戸の黄表紙の第一作『金々先生栄花夢』との関係である。無論「邯鄲」の当世化自体珍しい趣向ではないし、内容的にも影響は認められない。主人公が女性である点からはむしろ『風流浮世栄花枕』などに似る。ただし、内容的にも『栄花夢』以降の成立にかかり、又「当時の上方絵本作者は、江戸の該界の流行に敏感であつたらしい」とすると、本書の作者が『金々先生栄花夢』を見ていた可能性はあろう。その場合には江戸に於る劃期的作品も、上方では格別の影響を与え得なかったことにむしろ興味が持たれるかも知れない。本書が先行して江戸の春町に何がしかの影響を与えた可能性も絶無ではなからうが、先ず考えられないであろう。まあ良くある趣向の類似だけを契機に、特に関係を考える必要もないというのが最も正しいかも知れない。

上方の絵本は長く雑本として顧みられず、その研究はまだ緒についたばかりの状態である。まだまだ作品の発掘

や紹介が必要であろう。本書の如きやや珍しいものではなからうかと思ひ、ここに紹介してみることにしたが、実の所筆者はそう多くの上方絵本に目を通してゐる訳ではないので、不明の点が多い。大方の御教示をお願いしたいと思う。次に簡単に書誌を記しておく。

表紙 変り行成表紙(草花紋、巴、三段菱散らし)。二十一・五×十五・八糎。

題簽 一部のみ存。約十四・八×三・三糎。

構成 本文のみ七丁半。

柱記 なし。

丁付 各丁裏ノド(八丁のみ表ノド)「かんたん 壺」「かんたん 二」く「かんたん 七」「かんたん 八了」。

匡郭 四周单片。十八・八×十三・五糎。

以下、翻刻に際しては漢字、仮名遣い等、全て原文のままとし、句読点のみを私に付す。ただ合字の類は通行の書き方に改めた。又本文中墨譜を付した個所があるが、これは省略した。画面中の文字は見開きの本文の後に示すこととしたが、上方絵本は江戸の草双紙と異なり、本文が見開き毎に切れておらず次へ続いて行く為、その点不体裁なものとなる。諒とされたい。

(1) (3) 『近世子どもの絵本集』上方篇、中野三敏氏の「解説」。

(2) (5) 「江戸時代上方における童話本」(『中村幸彦著述集』第十卷所収)。

(4) なお本書の表紙は大内田貞郎助教授の御示教によれば、寛保から宝暦初頭頃の俳書に多く見られるものであるとのことであつた。或いは本書の刊年はもう少し引上げることが出来るかも知れない。

是は津のくにかたわらに呂洲ろしゅうといへるものなり。たまぐうけがたき人身にんしんをうけたりといへ共、ためしすくな

き川竹のながれの女となり、糸竹酒色にあかしくらすばかりなり。まことや都嶋原山にたつとき契情ましますよし、聞つたへまいらせ候。勤の身の一大事をもたづねばやとそんじ、たゞいまみやこしまばらへといそぎ候。

おはいり。

あいぐ。

夢相屋。

むそうや（壺オ）。

ひとむらだちいろいろざとに、日はまだのこる中やどの、かりねのゆめをみるやと、契淡のしゆくに着にけり。かけあんどを目じるしに、ちとものか尋たふござんす。ゝなんでござんす、こちへおはいり、と女のことゑ。ゝそんならごめん、とうちにいり、わたくしはなにはのうらにすむものなるが、きゝますれば此さとにたつとき太夫職ましますとかや。つとめの一大事をもきゝましたく、はるゝと登りましてござんす。ゝあるじの女、さてゝ是はよいお心がけ。其君はわたしがきついごねんごろ、おちかづきにいたしませう。マアゝおくでゆるりとおくつろぎといざない入る。

けんたんのまくら。

むそうや。（壺ウ・二オ）

呂洲はあるじとうちつれておくゑとをれば、ゝさぞおくたびれならん。先さゝ一つと、心よくもてなして、なにやらん錦のふくろに入しものを持ちで、是はまへかた粹の法をおこなはせ給ふ御方、此さとへ御こしあそばせし時、わたしへのおみやとて玉はりしまくらなり。是をしてねますれば、こしかたゆくすへのこと、ありぐと夢に見へ申ふしぎのたからなり。そもじもこれにてちとおやすとさしいたし、トリア其まに大唐まゝたいて、そばきりりやうりであげませうといへば、ゝさては是かきゝ及し契淡のまくらなるかや。是はみをしる門出の、よのこゝ

ろみに夢のつげ、

うかむせの貝盃。酒ゑん。(二ウ・三オ)

天のあたふることなるべし。そんならしばしおゆるしと、けんたんの枕にふしにけり。く。いかにそうもん申候。おきやうざん。わたしふぜいになんのかつちやいなあ。他国のみかどの御きさきに、呂洲をそなへ申さんとの、ちよくしこれまでまいりたり。ぢやらくとなぶつておくれな、わしやいやいなあ。ぜひおばいかではかるべき。御身きさきとなり給ふ、其ずいそうこそましますらめ。はやくこしにめさるべしと、むりむたひによつてかゝつてこしにのすれば、もつとも女はうじなふて、玉のこしとはきゝつれど、どうやらこわひやうにもあり、はねつく。

あひけう有けるあら玉の、

まことにめでたふさふらひける。

春のけい。(三ウ・四オ)

またうれしさは飛たつばかり、なんでもこゝはせうねぞと、天にもあがるこゝちして、玉のみこしにのりちらし、いそぎ入内をしたりける。さて御てんのていをみわたせば、まんなかに嶋だいかざり、鮫の舟もり鶏の羽盛、あまたのくわんじよ袖をつらね、金銀珠玉をかざりしかば、さすがの呂洲場うてして、つめをくわへぬばかりなり。西に三十三所にしろかねの札所ありて、こがねの光明をはなされたり。東に五十三つぎにこがねのみちをつくりて、白かねのふじ山をいだされたり。たとへは是は、

夏のけい。(四ウ・五オ)

東海道の駅には賓客を留たり、不信心の徳には来迎遅といふこゝろをまなばれたり。申あげます。なにこと

じゃ。〽御きさきにたち給ひてははや五十年なり。しかれば此仙やくをきこしめさば、御とし一千歳を持給ふべし。さるほどにこもかぶりやうかむせを、是までもちて参りたり。〽そもまあこもかぶりとは、〽是は伊丹のもろはく也。〽うかむせとは、貝盃の事である。寿めうはお千代と菊佐平次。仲るたいこが酌とりて、のめばかんろもかくやらんと、まへやうたへや、一寸さきはやみのよ。そりや

そつこでのふ。

がつてんじや。

六法でのふ。

かへしてのふ。

やあとさ。

秋のけい。(五ウ・六オ)

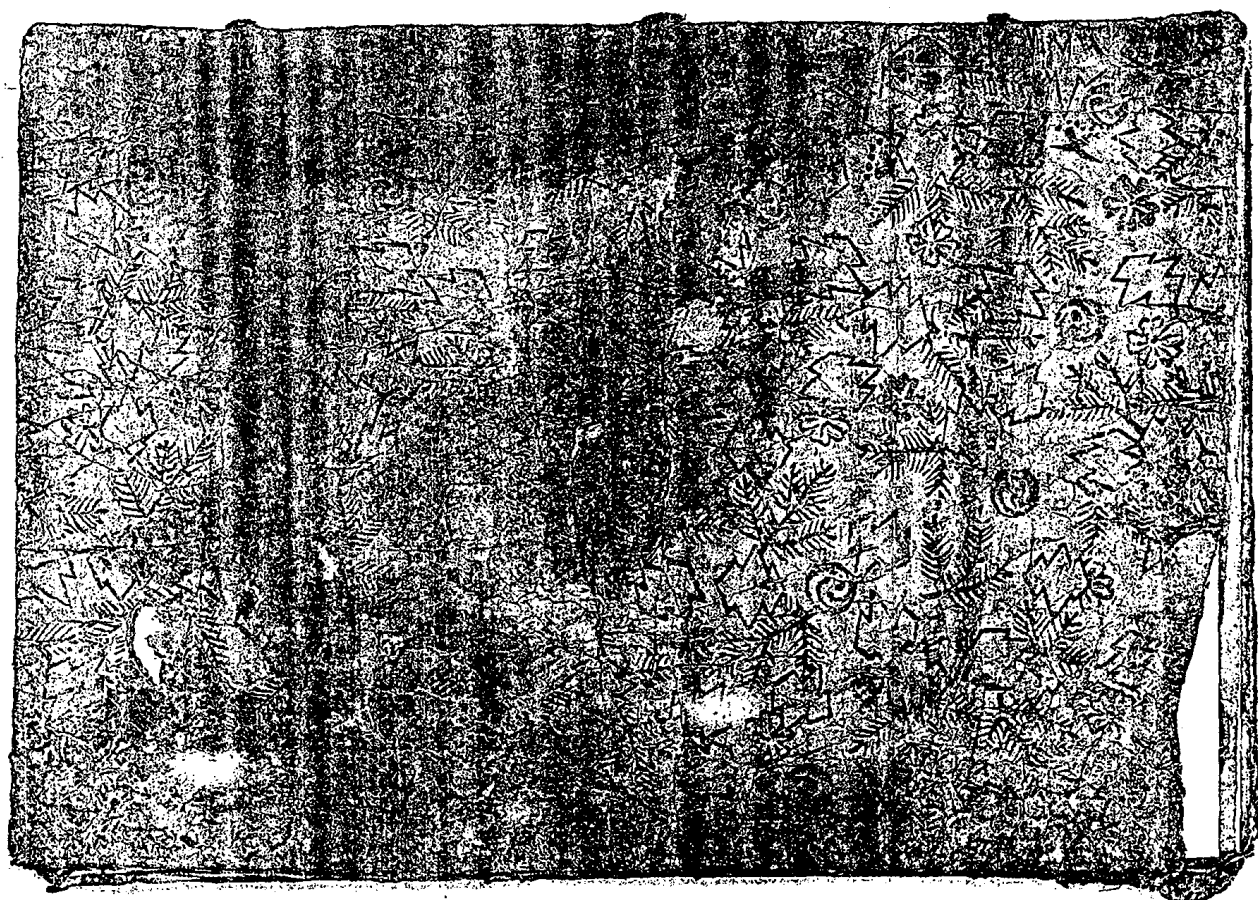
よがあけると、よるやらひるやらくらひどれ。日はまた出れといびきかく、春の花さけば羽ねやてまりのおともどんど、ひやうしそろへて万ざいはるごま。泉水には天満祭、てうさややうさの太このおと、らいのこへかとおびたし。さては夏かと思ふているに、いつしかちよの山坂こへたゑと、しぐみをどりの手びやうしそろひ、げい子中るがくどきをんどは、黄いろなこゑて紅葉のおどり。ゆかたのはづれより、はだへの雪のちらくと、冬のけい。(六ウ・七オ)

さては冬じやぞ、すはらい寒ごりのこへ、餅をつく柳のゑだに花さきて、万木千草ひときに、花やら実やら目のまへに、いづれつきせぬたのしみなれども、まことは夢のうちなれば、みなきへくとうせはて、ありつるけんたんの枕のうへに、ねふりの夢はさめしとおもへば、やつぱりなには嶋の内。〽サアく呂洲身じまひはよいかゑ。むかひのかごがきてあるぞへ。コレおすぎ、ごぜんはよいか。せんかうやがみへたらとつておきやと

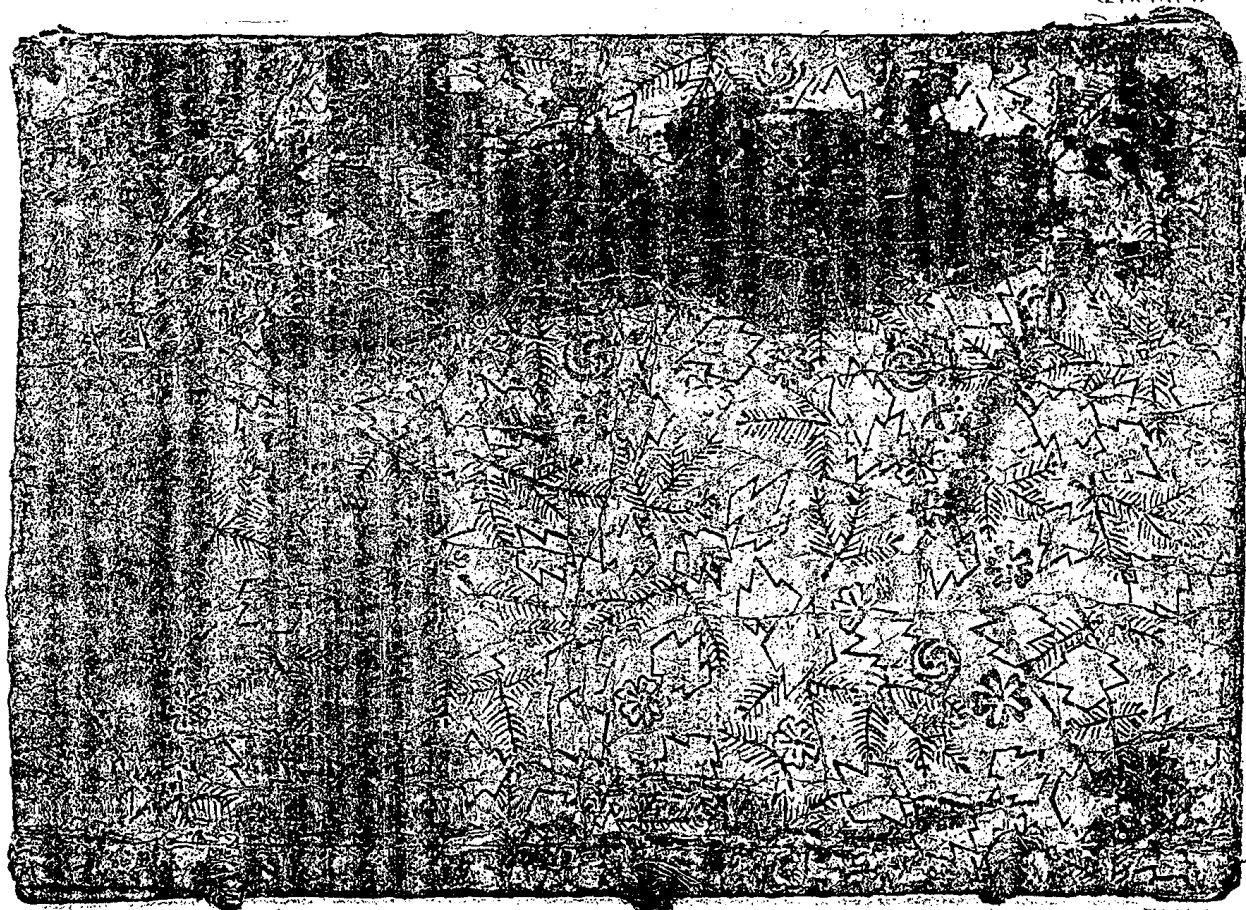
いふに、ろしうはアミそうじや、あいぐわののぞみもよはひのながさも、みなゆめじやとてさとりけり。

呂洲<sup>ろしう</sup>ゆめさめ、さとりひらく。

むかいかご。(七ウ・八了オ)

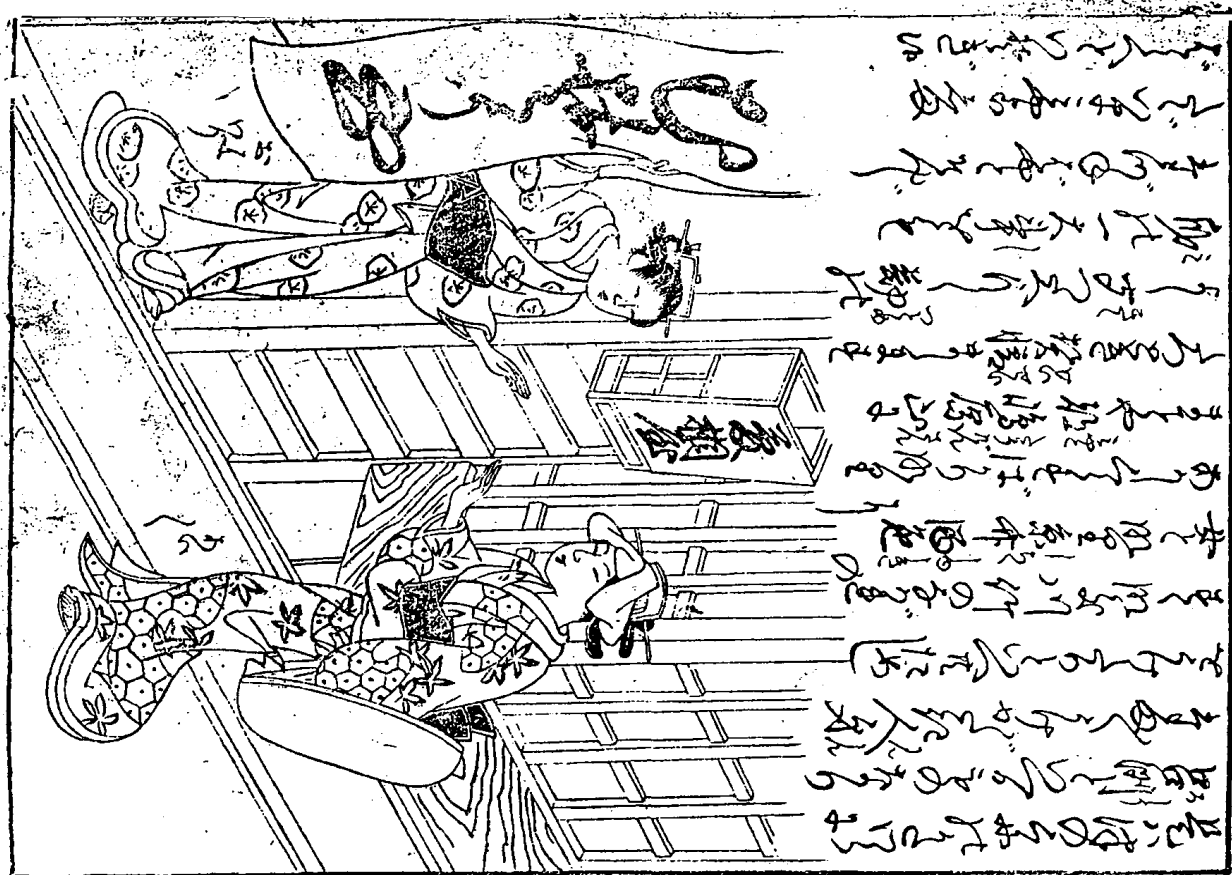


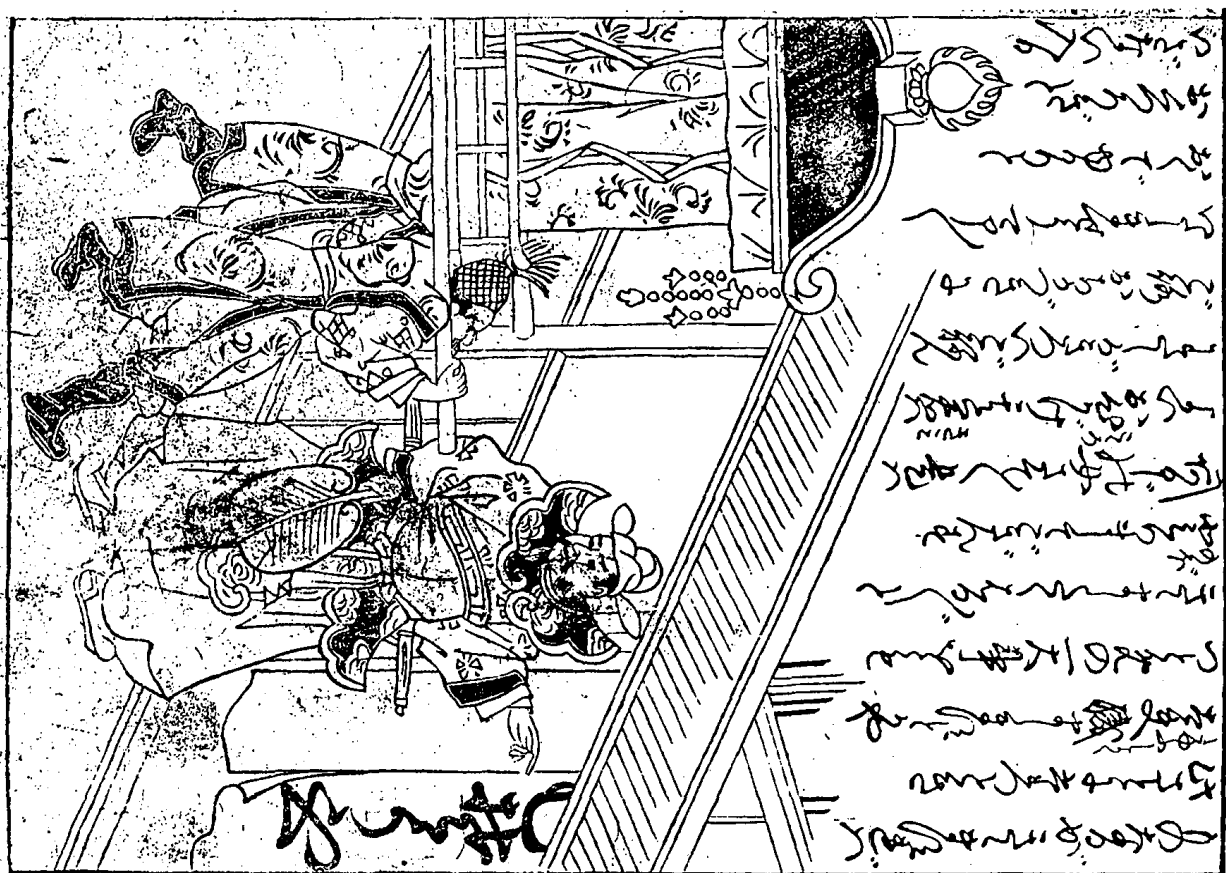
(裏表紙)



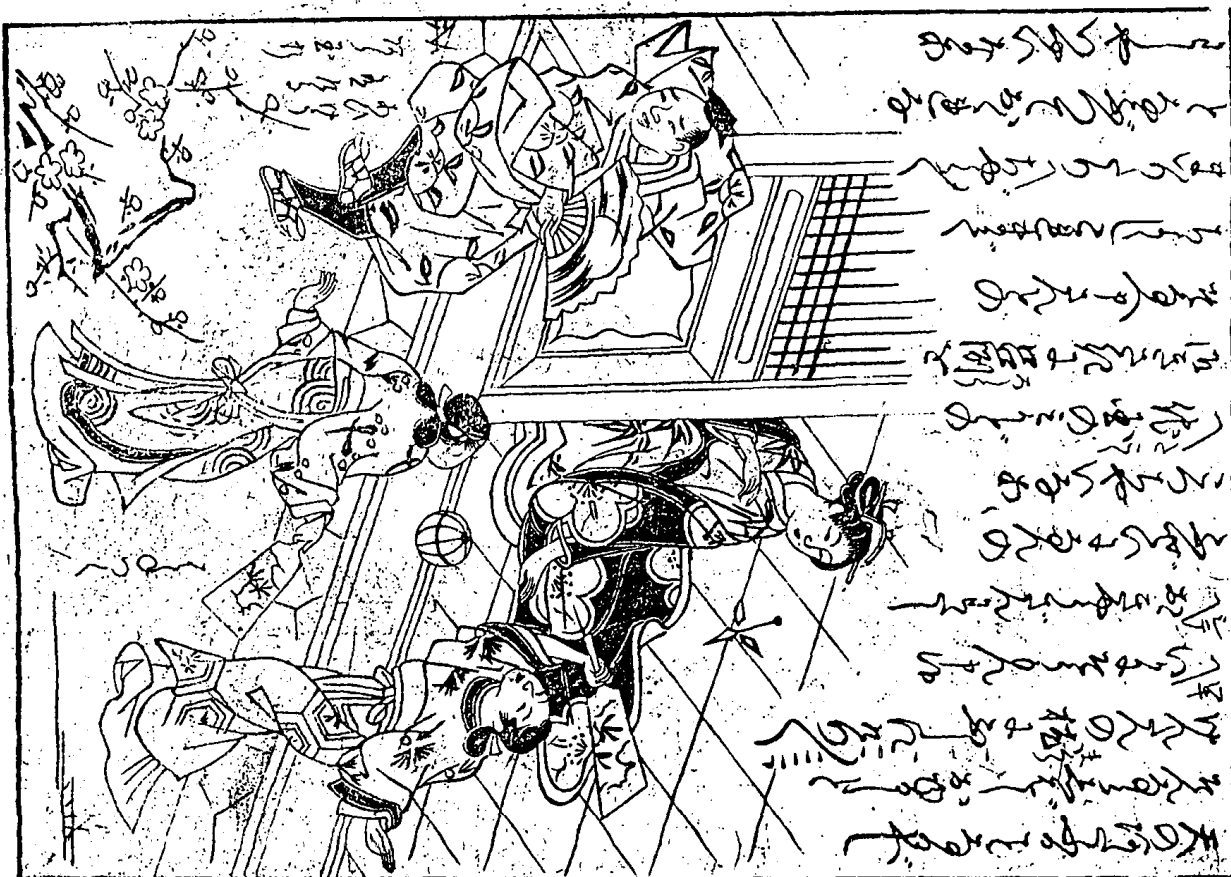
(表紙)

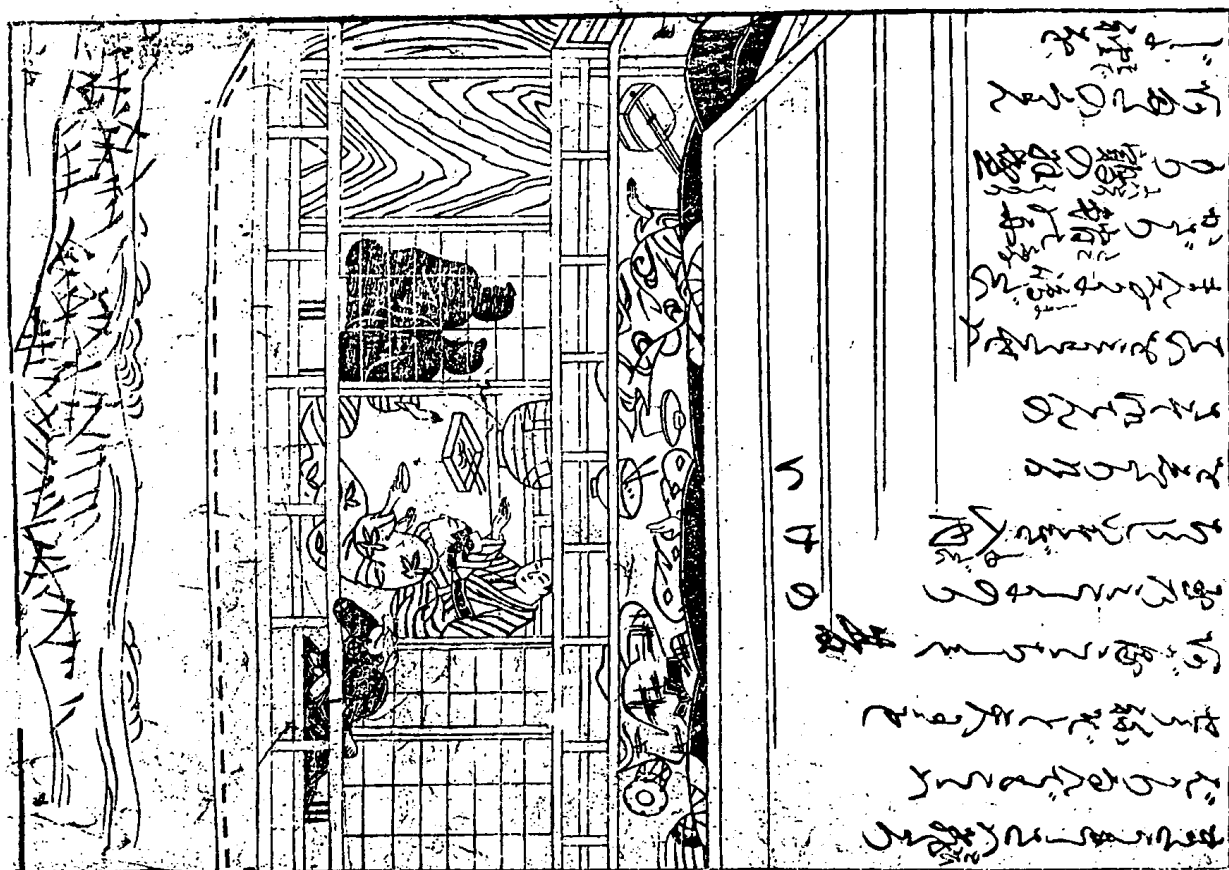












(四ウ・五オ)



